My Favorite in Harp's song

ハープ　私の1曲

第13回　本誌編集長　森　泰義　『スメタナ：わが祖国より～モルダウ』

これまで、多くの方々に「私の1曲」ということで、お話を伺ってきたわけですが、何度も「じゃあ、お前の1曲は何なんだ」と問い返されるケースがありました。改めてそう聞かれると、とてもひとつに絞り切れないし、確かにハープを本業にしている方々には無茶振りだなと思います。一方で、この1曲が時に生き方や考え方を変えてしまうダイナミズムに魅せられて、本コーナーを継続しているわけです。裏方ですので、私からはこの1曲が変えたアーティストの瞬間を捉えてみます。

サーシャ・ボルダチョフが銀座十字屋でミニ・コンサートを催した当時、まだお母様がマネージャーを務めてました。そのせいか、シャイで寡黙な印象を受けたのですが、後に同社主催のホール・コンサートや初の日本ツアーに帯同して得た印象は真逆で、むしろやんちゃ坊主そのものでした。カツオのたたきにウスターソースをかけて「こっちのほうが美味い」というし、よせばいいのに冬の新幹線ホームで抹茶パフェを食べて震えたり、コンサートに遅刻したり、結構大変だったのです。そんなサーシャですが、その陽性なキャラクターとハープの卓越した技術とで、どこか憎めない、応援したくなる存在でした。

そんなサーシャが明らかに変わったと思えた瞬間が、東京・ティアラ江東におけるステージで、「モルダウ」を弾いた時でした。それ以前にも、神津善行さんのコンサートのゲストであったり、デモ演奏は各地で行っていましたが、日本では初のホール・コンサートに、さすがのサーシャも事前には券の売れ行きを心配していたのです。それが杞憂に終わったのは、ラストのこの曲でスタンディング・オベーションを浴びたからでした。母国のロシア、ヨーロッパやアメリカに比べ、東洋の国・日本では勝手が違います。好まれる曲想も異なるし、マナーはいいが良かったときの反応が薄いとされる日本。そこへ締めの曲で、これが出た。理由はいくつかあります。「モルダウ」は、ご存知の通り、スメタナの連作交響詩「わが祖国」第2曲で、ヴルタヴァとも称される名曲ですが、屈指の難曲でもあります。本命は、チェコを母国とするヤナ・ボウシュコヴァ。そして、コンサートでこの曲を育ててきたグザヴィエ・ドゥ・メストレ。超名手たちが大切に温めてきた曲を、サーシャが見事バトンを受け継いだこと。また日本人は元々このようなマイナー調の哀愁ギトギトの曲が大好物であり、オーラスで一気にサーシャの演奏に心を寄せたわけです。誰の目にも明らかな超絶技巧も相まって、サーシャはもちろん居合わせた観客にも希望が宿ったのです。世界へ向け大きな自信にもなったと思います。胸に手をあて、カーテンコールに応えるサーシャの満面の笑顔は、今も目に焼き付いています。その後、中国での演奏、カーネギーホール内での演奏、サッカーワールドカップでの演奏と、彼は階段を着実に上り、サーシャではなくアレクサンダー・ボルダチョフと呼称を変え、トップの仲間入りをしました。ですが、私や日本の皆さんにとっては、いつまでも「やんちゃ坊主のサーシャ」であり、あの時の「モルダウ」が今のキャリア形成の一角を担ったと、私は疑わないのです。

EVENT SQUARE　イベント・スクエア

11/6　14 :00開演 東京・代官山チャーチホール
「Art Concert　音楽から紐解く絵画と文学」ハープ：中村愛

11/28　13:30開演 東京・六本木シンフォニーサロン
弟橘レイア　Autum　Concert

12/19　13:30開演　東京・汐留ホール
弟橘レイア　Winter Concert

The Last Chorus

本号は、編集長の入院により、1ヵ月遅れての発行となりました。ご迷惑・ご心配をおかけしましたが、今後もハープライフをお届けして参りますので、引き続きご愛読のほど、よろしくお願いします。

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義　2021年11月発行

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

11
2021

Vol.19
Ninteenth Issue

癒しのハープ特集

好評連載
井上久美子
ライフストーリー⑤

「さようならの向こう側」
楽譜掲載

季節のおすすめハープ
Vol.19
Drake

Healing Harp

癒しのハープ〜ハープセラピー

松岡みやびに訊く New Possibilities

最近、「癒し」という言葉を聞かない日はないほど、人は様々なストレスに晒されている。われわれが求めて止まない癒しとは何なのかといえば、「安心感で心が満たされている状態になること」に集約されるようだ。しかも、どうやらハープに癒しを高める効果があるという。単に演奏するだけではなく、癒しを与えることを目的とするハープ第二の可能性について探ってみた。

癒しの秘密は「ゆらぎ」にあり

すでに、音楽のリラックス効果は科学的に証明されている。キーワードは、「1/fゆらぎ」だ。「規則的な中にも不規則が混在しているゆらぎ」のことを「1/f ゆらぎ」といい、人は「1/f ゆらぎ」を感知すると、セロトニンが分泌され、脳の自律神経を調整し、リラックスやストレス発散の効果を得る。多くの癒し音楽は、この理論の応用だ。皆さんも体感してすでにお分かりのように、ハープの優しく温かな音色は、古代から一貫して変わらない。実際、療法として使われてきた歴史もある。では、ハープがどのようにして「癒し」を誘発するのか。松岡みやびさんを訪ねた。

コンクール弾きとセラピー弾き

松岡さんを訪ねたのには、理由がある。それは自身が自律神経の病を得た実体験から、ハープによるセラピーを開発したからだ。それだけではない。とことん突き詰める矜持は、彼女に心理カウンセラーの資格を得て、さらに脳科学者や音楽療法士に共同研究を持ちかけることにまで及んだ。科学的に裏打ちされたデータを自らの起点として、「ハープセラピー奏法」を開発したのである。興味深いデータがある。コンクールや音大受験のための弾き方と、セラピーに用いる奏法の音の波形を調べた結果、コンクール弾きは「直線」でセラピー弾きは「円」であり、セラピー弾きを30分聴いた人の脳は、いわゆる瞑想状態に切り替わり、副交感神経が高まって唾液量が3倍増えたという。なるほど、授業中に熟睡してよだれが出たのはこういうことか。詳細は、著書「聴くだけで元気がでる本」に譲るが、松岡さんは「なんとなく」をカタチにして、実践と検証によって効用を証明してきたところに信頼が置けるなと思うのである。

第二のキャリア・パスへの期待

こうして自分が癒され、その仕組みに納得すれば、今度は同じように困っている人のサポートもしたいと考えるのは、自然な流れ。「心理カウンセリングコース」もそうして始まった。心理学では、頭の中だけで考えて行動し、心の本音を我慢していると、体がその苦しさを訴えてくると考えるらしい。ストレスの原因である。クラスでは、各自に「心の声」を聴き、「自分は本当はどうしたいのか」ということをクリアにして、頭と心の統合を図っていくよう指導する。それは、ハープのレッスンにも活かされる。腹式呼吸で弾き、背中から大きく手を回して音の余韻を感じ、ミスを気にしない、次の弦を探さないといったアドバイスもされる。これらは、何もコンクール弾きを否定するものではなく、セラピー弾きの良さも加味したら、さらに大局に立てるということが、ハープセラピー奏法（ペガサス弾きとの命名がある）の肝になっている。ある意味、禅に通じるものを感じた。弓へんでハープを弾く、示すへんで心のあり方を示す禅。二つの似た漢字にも、どこか古来から相関性があるのかもしれないと思った。

最後に、松岡さんの徹底ぶりを。最近、拠点が移ったのだが、写真のとおり、ハープセラピーを学ぶには絶好の環境を整えた。マリー・アントワネット王妃のプチトリアノンで使われた椅子、生地、シャンデリア、暖炉など、できる限り再現した。こんな心が休まる静寂さと、ゆらぎのあるハープの音色が流れる空間から、いつか彼女を追うハープセラピストが出てくるだろう。こうしたハープ第二の道とも言えるキャリアパスを新たに生み出しているところに、ハープの未来への真摯な姿勢が見えた。

（取材＝本誌編集長）

特注品のサルヴィハープ、ミネルヴァ・ホワイトを弾く。イメージは、自身の奏法とマッチしたペガサスだ。

▲新しい拠点では、ハープをこよなく愛したマリー・アントワネットのプチトリアノンの調度品を再現した。気品と静謐さが漂うスペースだ。

▲「入門には最適」と、ご本人も太鼓判を押す、銀座十字屋オリジナルの15弦ハープ「クリスハープ」。まもなく、クリスハープの教室もスタートするという。

独占
連載手記

夢は
ハープと共に

井上久美子ライフストーリー

KUMIKO INOUE

第5章 オランダ留学生活③

A life filled with harps

ベルクハウト先生が毎年7月に主催なさっていらした国際ハープウィークが一番のハイライトなら、つぎに思い出に残っているのは、オランダの宮殿に伺ったときの光景です。ベルクハウト先生が運営していらしたクィークホーヴェンの名誉総裁がオランダ王室だったために、時々王室ご一家のどなたかがお供を一人くらい連れてみえることがありました。おいでになると、台所で使用人たちとお話しをされたり、とてもフランクな関係でした。

▲1966年12月30日オランダの宮殿訪問時の様子

ある年、その時の女王様の次女のマーガレット王女様が結婚なさるので、お祝いを持ってベルクハウト先生とご一緒に宮殿に伺うことになりました。当日、キョロキョロ目を輝かせて歩く私をご想像ください!!!なんとその日初めて日本から持ってきていた着物を奮闘しながら一人で着ました。写真をみても、ひどい着付けだったのがわかります。

ベルクハウト先生のレッスン

外国に来てはじめて先生のレッスンを受けたときはとても緊張し、またどんな風なのか好奇心もありましたが、実際はとても自然で、途中から肩の力が抜けたのを覚えています。

原則、週一回、屋根裏の小さな私の部屋に先生がいらしてレッスンをうけました。初回から一貫しておっしゃりたいことは同じだったと思います。曲に対するアプローチ、音色、リズム、ハーモニー感、ノイズ、アーティキュレーション、指使い、そしてその曲の背景など、多岐にわたりました。

雑音に関してはとても厳しく、どのような時も雑音は聴きたくないと。それを防ぐためのいろいろな方法、対処法は、まず久美子がどうしたらよいか自分で考えなさい、と。その後「こうしたら?」「こうするとクリーン、クリアになります」と。「まずノイズの原因を突き止めること、爪から?指から?ペダルから?どんなに難しいパッセージでもクリーンでなければなりません」と。さすがコンセルトヘボウ管弦楽団のソロ・ハーピストでいらしただけあって、リズムもペダリングも厳しく指摘されました。「人に気づかれないように静かにペダルを動かしなさい。*p*でも、*pp*でも遠くまできこえるような音、*f*でも*ff*でも割れない深い音を、いつでも自分の出している音をちゃんと聴いて」と。本当にプロフェッショナルのレッスンでした。毎回とても充実した、あたたかな、次回が楽しみになるようなレッスンでした。日本に帰国してからも、結婚してからも、ときどきコントロールを受けに行っていましたが、そこに座って聴いて下さるだけでも素晴らしいレッスンになっていました。

▲クィークホーヴェンの小ホールでベルクハウト先生と演奏会

日本とは異なるオランダの風習

オランダの文化、風習についてほんの少しだけお話いたしましょう。クィークホーヴェンでは、先生のお考えで、クリスマスの前に必ずアムステルダムの刑務所で演奏会をしてから、皆で伝統的なクリスマス・ディナーをいただきました。たくさんの演奏会をオランダ留学中に開催しましたが、古城の中、燭台の光だけでの演奏会はとても大変でした。

お客様はロマンティックで素敵と思われたでしょうが、ろうそくが熱くて、炎がゆらゆら揺れてハープの弦が分からなくて、とても弾き難く、音程も狂い、私にとっては冷や汗ものの演奏会でした。ちっとも優雅ではありませんでした。私にとってはどんな状況下でも最善の演奏を心がけるという大切なことを学びました。

▲燭台の光だけを頼りに演奏会を行った古城の前で

オランダ人はきれい好きで、お掃除大好き。窓も床もピカピカ。お花大好きで、窓にはいつもきれいなお花がびっしり。しかもそれがみな、家の中でなく通りを歩く人が楽しめるように「外向き」に飾るのもびっくりでした。少々の雨では決して傘はささないし、街のアチコチで男の人が井戸端会議?みたいにおしゃべりをしていましたし、そう言えばイタリアもそうでした。働きバチの当時の日本では考えられない光景でした。

バナナをフォークとナイフで食べるのも初体験でしたし、葡萄が出され、食べ終えた後、皆さんのお皿の上には茎しか残っていなくて、種も皮も食べてしまうことにギョッとしたのも思い出のひとつです。自分だけ葡萄の種や皮をお皿の上に残すのはとても汚く見えて、我慢して度胸を据えて飲み込みました!それ以降、葡萄は人前では食べませんでした。うなぎもマーケットで売っていて、生きた状態で、ヌルヌルしていて、どうみても私にとっては気持ち悪いのですが、友人が「うなぎ好き?」と尋ねるので「大好き」と言ったら、「ではご馳走してあげるわ!」とマーケットで買ってきて、家でうなぎを輪切り、ぶつ切りにしてなんだか得体のしれないやり方で煮て、ソースをかけて出してくれましたが「好き」と言ってしまった手前、残すのは失礼で耐えて食べました!お味は全然覚えていません。どの国に行っても異なる風習、文化、歴史があるので、きっと同じような経験をしたことでしょう。

（次号へ続く）

●筆者略歴：東京藝術大学大学院在学中にオランダ政府の奨学金を得て留学。以後、世界各国で演奏、コンクールの審査員、指導を行う。現在、世界ハープ協会コーポレーション・メンバー、武蔵野音楽大学特任教授、日本ハープ協会副会長。

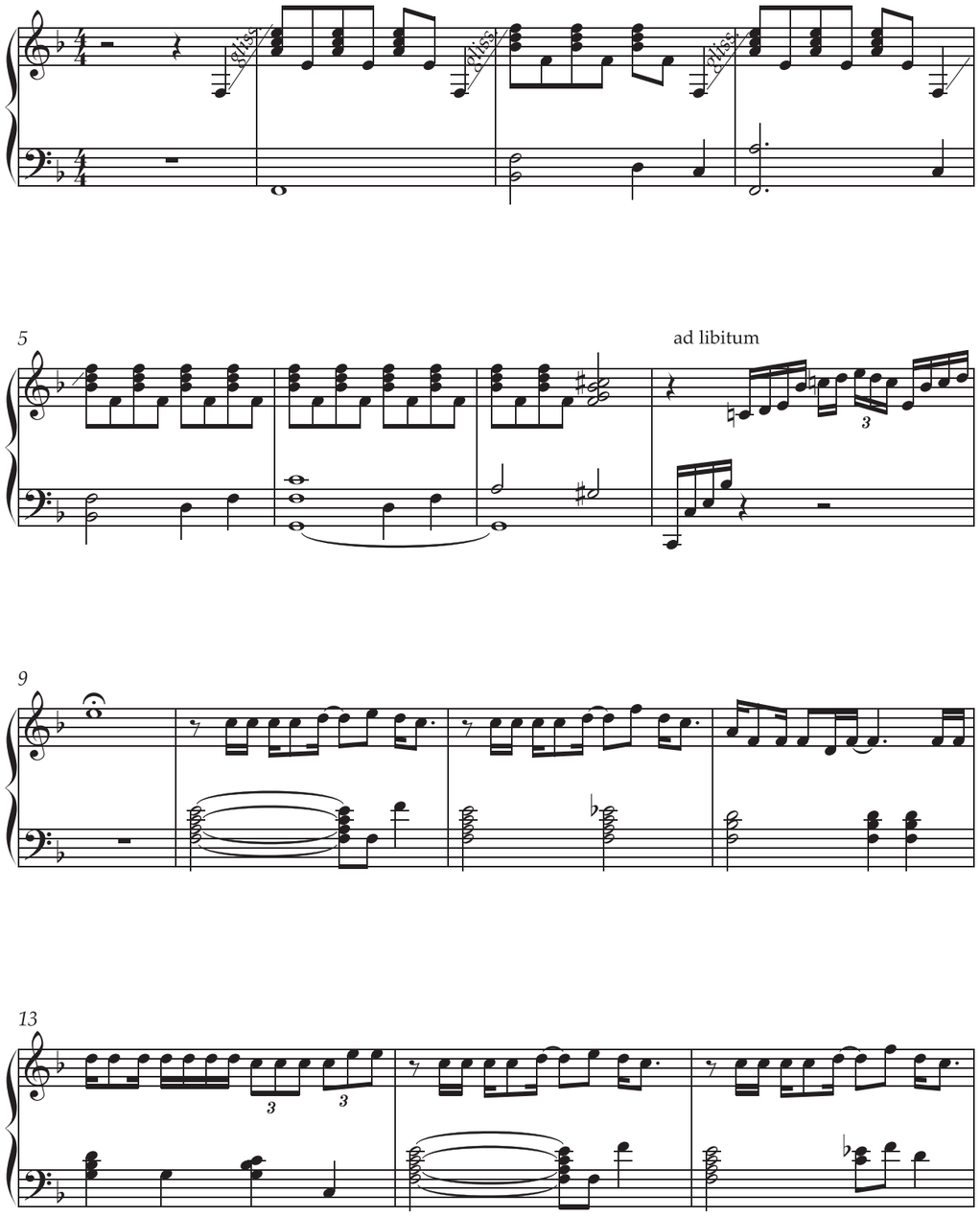
Encore planning

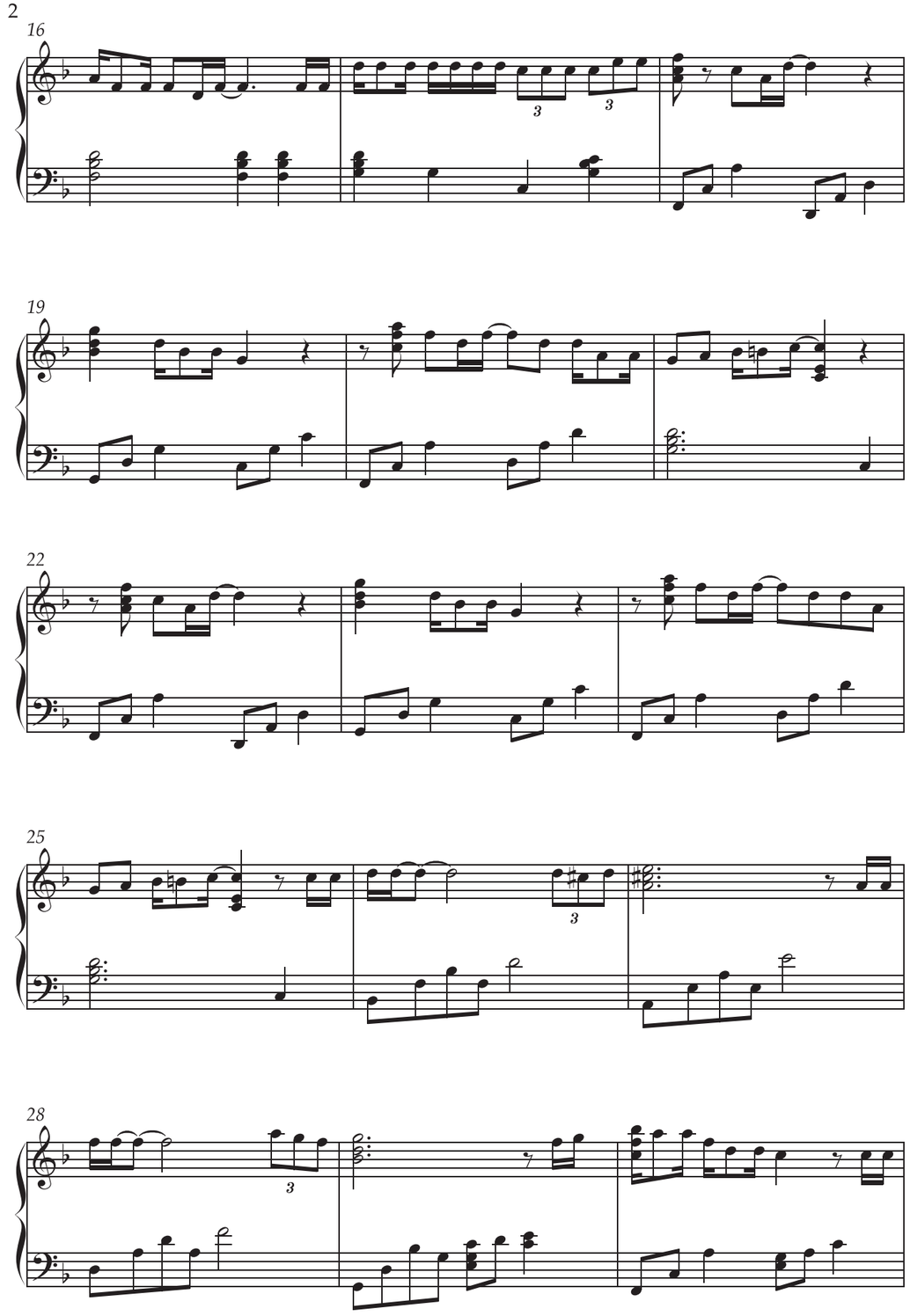
アンコール企画

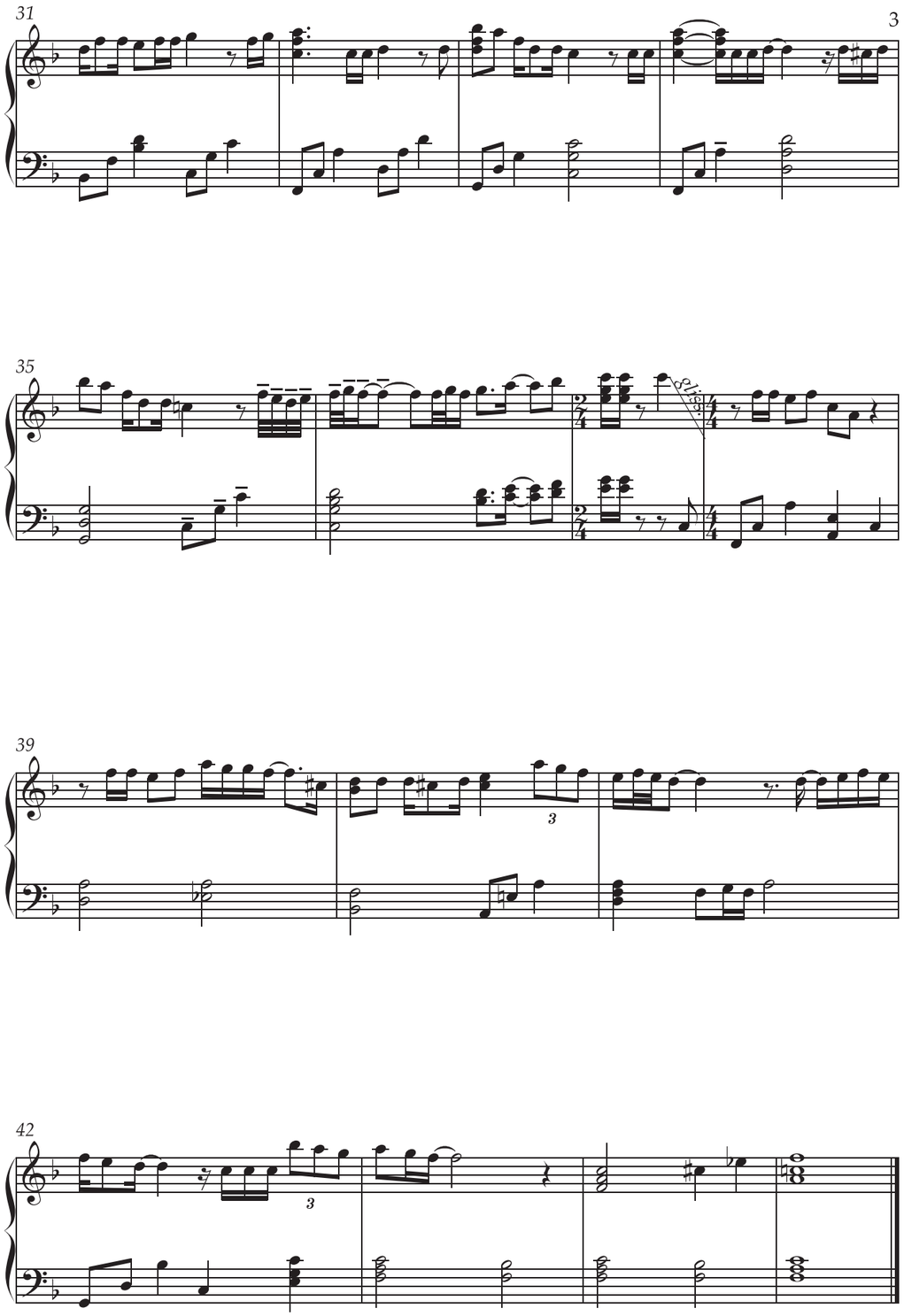
「さよならの向う側」楽譜完全収録

●監修=邊見美帆子　JASRAC: 2108391-101

いまも興奮冷めやらぬ夏のハープの日イベントで、お笑い芸人・高佐一慈（ザ・ギース）が、アンコールで弾き好評だった、山口百恵の名曲「さようならの向う側」のハープ譜をここに完全再現しました。







New Face
New Sound
Katherine Siochi
キャサリン・シオチ

中国の伝統的なメロディである「春江花月夜」を、ハープで弾いているのを聴いたとき、正直驚いた。香港のハープの名手ダン・ユーが弾いているのならまだしも、それがアメリカの女性が弾いているので、なおさら驚いた。譜面通りに弾きましたでは、中国古謡の独特の間（ま）だけは、どうしても表現領域が奥深く、なかなか本物の雰囲気が出ない。ジャンルを跨ぐ際の違和感を感じさせず、余裕すら感じさせる。「へえ、ハープでこういうのもできるんだ」という新鮮な発見を促してくれたのは、キャサリン・シオチである。

曲への深い解釈

調べてみると、シオチはジュリアード音楽院でナンシー・アレンに師事、第10回USA国際ハープコンクールの2016年の金メダリストという、まさに米・ハープ界のホープのひとりだった。だが、シオチが将来への伸びしろにおいて、頭一つ抜けている感があるのは、曲への深い解釈と構成力に長けているからだ。ジュリアード時代、幼い頃から習って来たピアノにさらなる磨きをかける意味で、第二楽器としてピアノを専攻したという。これが、ハーピストであるシオチを、大いにのし上げた。専用の楽譜の数が圧倒的に少ない、いわばハーピストの宿命ともいえるのが、ハープ譜への置き換えである。彼女は、このハープ譜を作るのが趣味なのだという。ドビュッシー、ショパン、ラフマニノフ・・・こうした作曲家たちの作品を、本来のピアノ曲として弾きこむ。そしてそれをどうハープで表現するか。今度は、ハープで試行錯誤を繰り返す。こうした課程を経た曲を、レパートリーに加えてきた。彼女の独特な空間と曲の構成力は、こうしたひと手間から抽出され、現在の表情豊かな曲の解釈に繋がっているのだろう。

最近、男性ハーピストたちの近年にない充実ぶりにすっかり目を奪われがちだが、シオチのアプローチは日本人奏者にもかなり参考になるのではないか。CDもリリースし、ますます充実しているようなので、今後の動きは要チェックである。

Photo=Courtesy of Katherine Siochi Home Page

Harp Life CD Collection

ハープライフ選定 ハープ銘盤コレクション

時を超えて、いつまでも残しておきたい、
ハープの銘盤CDをご紹介してゆく
コーナーです。

Harp Life GOLD DISC
第9回

「バラード・イン・レッド／エマニュエル・セイソン」

今やフランスを代表するのみならず、世界でも指折りのハーピストであるエマニュエル・セイソンのコンセプト・アルバムだ。例えるならば、ザ・ビートルズの「サージェント・ペッパー・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」のように、テーマ性をもったハープ曲のタペストリーといった風合いなのだ。ただ、本編に取り上げた作曲家たちが、文学といかに深い繋がりがあったか、そしてサルツェードの後継者を自他ともに認めるセイソンが、愛器の赤＝レッドにまつわる曲の選定をするなど、群を抜くこだわりとインテリジェンスを感じさせる作りとなっている。

文学をコンセプトに据えるための背骨になっているのが、エドガー・アラン・ポーの「赤死病の仮面」だ。セイソンのインスピレーションによって、前半をカプレ、後半をレオーネの楽曲によって、いわば本のサウンドトラックを編んでみせる。いささかやり過ぎかと思うが、ジャケット写真には劇中の魔物に自身が扮した写真を採用している。そこまで入れ込んでいるということだ。ルニエの「幻想的バラード」採用しているが、この曲はルニエがポーの「告げ口心臓」に影響されて作った曲。ドビュッシーに多少の違和感があるが、実はドビュッシーもポーに影響され、ポーの「アッシャー家の崩壊」のオペラ化に着手したほど。つまり、単にエドガー・アラン・ポーへのオマージュを捧げるという体ではなく、あの架空の人物サージェント・ペッパーに寄せた様々な物語のつづれ織りのように、ポーに魅せられた音楽家たちのハープ楽曲集に仕上げたのだろう。実際、真顔に戻ったセイソンが、ポーへ献花として、自身が最も敬愛するサルツェードの「バラード」を演奏し、赤とポーのサウンド・グラフィティを締めくくっている。

芸術という言葉は安易に使いたくないが、幾重にも張り巡らされた文学と音楽の邂逅や、その演奏技術の高さに触れると、セイソンは現在のハーピストの中では屈指の芸術性を感じさせるひとりであると確信する。メトロポリタン歌劇場の主席ハーピスト就任など、本作発表以後、着実に階段を上っており、本作が今後の活動の起点となるのは間違いないだろう。

お買い求めは、こちらから!

季節のおすすめハープ Vol.19

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なハープ。
今回は、「ドレイク」です。

新しい音を生み出せるドレイク。

今回のお勧めは、ドレイクです。世界二大ハープ・メーカーであるサルヴィとライオン&ヒーリーの合体は、斯界を大いに沸かせました。それぞれのブランドは今まで通り存在しますが、むしろ両雄が手を携えたことで何が生まれるのかという点に、興味は集中しました。ドレイクは、まさに両社が出した具体的な答えであると言えるでしょう。

ライオン&ヒーリーが久しぶりにリリースしたレバーハープですが、このドレイク、実はサルヴィに制作が委託されているのです。

ハードメイプルとオクメ材の響板で生み出されるサウンドは、明るくてクリアでよく共鳴し、ドレイク専用に開発された「バイオカーボン®弦」が張られており、これが理由かどうかは断言できませんが、音色はどちらかといえば明るい、強いトーンが出ます。まさにここが面白いところで、作りはむしろサルヴィらしい、ヨーロピアン・シルエットでありながら、出てくる音はライオン&ヒーリーを生んだアメリカらしいクリアで明るいサウンドが出てくる。まさに両社のいいとこ取りをしたようなハープなのです。いま2つの会社、どちらのハープにしようかと迷っている方などは、両方の特性を兼ね備え、今後このハープならではの新しい音を生み出せるドレイクをお勧めします。ドレイクとはドラゴン＝竜の意味で、なんでも心理学者ユングによれば、竜とは新たな命を生み出す土台である母の投影なのだとか。今後の両社によって続いてゆくであろうコラボレーションの幕開けには、相応しいネーミングかもしれませんね。カラー・バリエーションは、ツートン（バーガンディ&ナチュラル）、マホガニー、ナチュラルの3種類。登場したときは衝撃的であり、ある意味ドレイクを象徴したカラーリングであるツートンが人気モデルとなっています。今までは歴史と共に歩むハープが多かったですが、新たに歴史を創っていこうとするあなたには、ぴったりな一台です。

Drake
ドレイク